

---

# 機械仕掛けの左腕

戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機械仕掛けの左腕

### 【Zコード】

N1063Z

### 【作者名】

戒

### 【あらすじ】

2105年。様々な分野の技術が向上し、様々な能力を持つ人々の存在が容認された時代。

超能力操る”超能力者”。

超能力者の劣化版と呼ばれる”感染者”。

何ら人と変わらぬアンドロイドなど、様々なものが現れ、造り出された。

様々なものが現れ、造られると同時に、それら使つた犯罪も多発するようになつてゐた。

そんな時代を生きる一人の少年がいた。

彼の名は霧崎 灰斗。  
キリサキ カイト。

昼間は学園一の問題の部活、非公式部で妨害工作や暗躍活動などに精を出し、生徒会＆風紀委員＆執行部と戦つ日々。

家では、世話焼きで灰斗にベツタリな姉と猫かぶりの凶暴な妹、そして自称最高水準ロボなどと過ごす日々。

そして外では、学園で名高い三姉妹と仲良く過ごす日々。

そんな彼の本当の姿は……

この作品は、エブリスタにも投稿しています。

## プロローグ

しかし、このままではひたすらがる、あかじけない感じ。

やくまえのカインナーのみたことのとかくねじでハシハシしたの、  
うすこかわにつけられたピンクいろのやわら。

はだこるのうひませうつこてる」こやこのズボンジヒパンクころ  
のあこだからみやめのしろこなにか。

「ふじょふじょしたまぬこのに、せんとうめこのまくじつまれたピ  
ンクのパソコンのやうなものなのにか。やれとおんなじのがゆかにと  
びかってる。

ハムのみたいなのがわきながらして、ぐらぎぐらぎになつてる。

ねじーねじーせげんかんからかえてつけてる。

ねかーねかせよくねかんなー。

おこせーねねたにんじゃも「みたこになつてる。

三  
七

バガンツ！

「誰かい」

「だいじ  
...」

「なつ！？」

なにか考へる。また、みんなをぐわやぐわやにしだしたの?

「ひつ！」

なにかさけんでる？

「落ち着けっ。落ち着くんだっ」

「とにかく、中を確認する。もしかしたら向かあるかもしない」

「シラシラしておじがき」<sup>1</sup>。

もしかして、せんべりを食べられたの？

みんなさうな感じで、元気になれたの？

「ここへねどりがって、アトがひりこへ。

「ハハー。」

「いやめ……嘘。嘘アヤウ。

おじなのうどがなんでそこまでいってる。

みんなさう思つたこののもつて、一だんじゅわれてしま。

「やうのうとかな？」

「「」」いや生きてる奴なんていない。みんな」

え？ いまなんていったの？

「奥さんとお嬢さんは  
せんつ……」

「ねつだな。でも、確かにこの家には男の子がいたはずだぞ。探すん  
だつ」

たぐわんのおしおどがある。せくをせかしてゐる？ せくをぐわく  
ぐわくにあるの？

こわい。こわいよ。おとーさんつ…… おかーさんつ……まい  
つ…… みんなつ、みんなビー？」

にげたいつ…… みんなをせがしたいつ…… でも、うづかないよ。

いたいよ、いたいよ。たすけて…… だれかたすけてつ……

「つ！？ いたよ！！ 男の子だつーー！」

「なに？」

「なんとか生きてるみたいよ。ホント、生きてるのが不思議なくらいの状態なのにね」

みつかつた。ぐち、めぐら、ひがね、ひが

「アーリー、アーリー、アーリー、アーリー」と呼ぶのがす。

めがためたら、まつしろなへやでまつしろなベットでねてた。

ぼくのまわりに、なにかたくさんものある。

「ん?  
起きたのかい?」

くやこひつじこらへをめたせんのひどがせこつした。

おこしやわとかな?

「えいがかな? 駄分な」

「わからぬ……」

「わづか」

おこしやわふせこすにわひて、せくのねがくへじこぬ。

「あたしは……怖こかい?」

なんでそんなのわくの?

ぼくはわくなんて

あか、アカ、あか。

アカい水たマリヒシルイ。ハムヒピんク。スンボジにウーンなー。  
ぐチやぐちヤのグチヤぐチヤ。ミンナ

! ! ! ! !

「 こわいっ！ こわいっ！ こわいっ！  
おとーさんはつ！？ おかーさんはつ！？ パーはつ！？ みんな  
はつ！？」

「チツ、錯乱状態かっ！！

お二つやさんじゅくおつてれどる。

あつたかい!

「大丈夫。君は生きてる。お父さんたちのことは……あとで教えてあげる。だから、落ち着くんだ」

おこしやれんがぼくのかおみて、やれしへわがうへ。

「いいね？」

「うん」

おこづかれたせがめへがおひへがめでわきはつこられた。

ちよつとたゞひくなかつたけび、ここにおいがした。

びょーいんからでねたぼくせ、おこしやれこのせんせーにトセにわ  
りなに、しらなこおつむのまえにわく。

「今日からここが君の家だ」

「謀るのをやめた。」

セんセーが、彼の手元に届いたのである。

「そうだよ」

「おじいのあと、こない？」

「ん~、このけどみんな良い人だよ」

「おじいのあとがこのならやだ。せんせーとこひしょがいこひ」

せんせーのあじてんへこしてせなれなによつてかわ。

「困ったね~」

せんせーはあたまをかきながら「ぱいしゃくぱくぱく」しゃべる。

「あたしの家はあや！」

ほくのまえにあむねりのとなつてあるおひがをみびる。

「あやこなんだけどね、あたしがとつてもだっこの。だからあこま  
り家にいられないの。わかる?」

「うる……」

「あたしは君を一人にするのが心配なの。だからね、あたしの親友の家にしづらいくの間君を住ませてもらひたの」

「うる……」

「あたしが帰つてきたときは一緒にいてあげるから、あたしがいな  
い間はこの家で待つててね。わかった?」

「…………」

「よし、いい子だ!」

せんせーはまくのあたまをなでてくれた。

「じやあ、行くよ

「うる

せんせーはまくのへりをひっぱって、おひいのパンポンをぬした。

すぐにニアがひらこて、なかからおんなのじがふたり、ぴょいひつ  
かおをだした。

「だーれ？」

「だれ？」

「あたしだよ、志穂だ」

せんせーのなまえをきいたら、かわかなせんせいがせん  
せー」とびつこってきた。

「しほりやんだ~」

「元気だったかい？」  
「う~」

「げんき~」

うつむかなおんなのじは、うれしへりせんせーとしゃべつてゐる。

「うーん、わたくしのやうなのは、アトのせいいかでやるーみんな  
かわいがこむだ。

「おー、うーん、おねがいやー

すくはつねなせつのやうなのは、すべくおつかのなかにまつり  
うとしてたけど、わざなせつのやうなのは、まつりまつた。

「じゃー、あたしは先に中入りするからねー」

せこせーせたぜーふくらせながりおひせこつてこつて  
せきひこつてこつてこつてこつてこつてこつてこつて  
つた。

ぼくがせこせーがほこつてこつてこつてこつてこつて  
のやうなのがぼくにいちがうこつてこつてこつてこつて  
ひよくながりがけ元へ戻がりがけ元へ戻がりがけ元へ戻が

「ねえ、ねえー

「え? えと?」

「せこねー。」

『ぼくはおのまおひのなかにひつぱいられた』

「…………」

ねつめなほりのおとなのは、なにかわないでずぐれかくのドア  
をあたへやひまつてこべ。

わつねなほりのおんなのじや、ぼくをひつぱりおとなじへやこ  
はこつてこつた。

へやにせこぬと、せんせーといなこひどがたのしへじまなじ  
た。

「おー、来たみたいだね」

「るの子がアソタの隠し所？」

「く～、志穂さん隠しぐかあ」

「夫婦でボケんなつーーー！」

スペパアアアンツーーー！」

せんせーがハリセンでふたりをおもにつきりたたいてる。

「志穂つーーー アンタよくも顔面呪いてくれたわねつーーー！」

「まあまあ、良こじやないか

「良くないうみつーーー！」

「いや、いんじゃない？ 良い感じに整形出来そうだし。もう一発  
いっヒベーーー！」

「けたぐるわよつーーー！」

おんなのひとが、せんせーとたのしゃつにくみて？ をしてゐる。

「…………」

「お～～

おつかなせうのおとなのにはムスッとしたかおで、ちりぢやなせうの  
おとなのにはおもしろいにせんせーたちをみてる。

「ナリナリやめないか。子供たちも見てるだ〜。

「えへへ、えへへ、へへ、

「はあ、はあ、は？」

「どこのどがせんせーたのあこだにこつてふたつをとめる。

「あ、ああ。ごめんね。私としたことが、子供たちのことを忘れ  
てるなんて……」

「すまんな、チビビジモ

「僕もはじめまして、だね。僕は柊秋つて言つんだ。よしじくね」

「ぼくたちはすわると、おんなのひとがぼくのまつをみててきました。

「はじめまして、私は柊柚木よ。よしじくね

「みきねさん?」

「あら? うれしいことつけて「オバサンだよ、オバサン」してほんま?」

「まあ、二人のことのは放つておこしてもいいよ」

「おとこのことはあきれがおでふたりをみてそういった。

「僕もはじめまして、だね。僕は柊秋つて言つんだ。よしじくね」

「…………」

やせこわいなかんじのひとだとばかり、やつぱつおどけのひとはいる。

「ん？ どうかしたのかい？」

ぼくがだまつてると、しづかさんがぼくのかおをのぞいてきた。

「つー？」

「大丈夫かい？」

しづかさんはぼくのかおをみながらきこえてくる。

「…………」

「あ～、秋つか。ちよつと、ちよつと」

だまつてると、ぼくをしづかさんがあしょあしょしてると、せんせーがしづかさんをてまねをしてよんだ。

「なんだい？」

「ちよっといろいろあつてね。その子は人が怖いんだ。特に男が、  
ね……」

「…………せつか。わかつたよ」

せんせーとしゅうわせんがなにかはなしをしてるみたい。

「ちよっと。その話聞かせなさこよ」

「柚木。今はまだ言えない」

「…………せつか」

せんせーたちをみると、ちよとやなほりのむんなの「がまくの」  
をひっぱってきた。

「なに?」

「アタシはね、ひにひもあねこつてこいつ。よめこくへー。」

やめんなよ、お前は。おまえがやめて、おまえがやめなさい。

「かえで」

「え？」

おつかなほうのおんなのこもなまえをおしえてくれたのかな?

かえでちやんつていうんだ。おひやなほりのおんなのじよ。

「えと、ほくは……」

「アーヴィング、君がこいつ？」

「ほくもなまえをこおつとしたけど、おれねえさんじゅうがれた。

「まあは12ヤコです」

「……12歳には見えないわね。

「ひつひつなの？」志穂

「あ～、その事情も今は言えないね。

まあ、強いて言つたり、過度の精神的ダメージが原因の精神不安定状態だよ」

「ふう～ん

ふたりはまたなにかのはなしをしてゐるみたい。なんだり？

ぼくがかんがえりをしてると、あおこりやんがまたてをひっぱつてきた。

「なまえは？」

「あ、えと。ぼくはあつれわ……

「ん？　ひつしたの？」

ぼくのかおをしこぱこわづなかおをしてみてくれるあこやん。

「あつあつ かこと」

「かいじこ？」

「うそ」

「かいじこ～」

「うれしそうなかおをしたあぬこわやんが、ぼくはベッタコベツ二  
てきた。」

「よかつたね、葵。お兄ちやんができる」

「うそー。」

「楓は嬉しいのかい？ 弟ができる」

「.....」

みんなたのしそう? にはなしをじてる。

でも、ぼくのこもつとは……

「ん? どうした、灰斗」

「こもうとはまいだよ」

「あー、新しい妹が出来たんだよ、新しい妹が

「あたらしくこもつと……?」

「そつ。新しい妹だ。麻衣ちゃんの妹でもあるんだよ」

「…………ぼくとまこのこもつと…………」

「そつ。二人の妹だ」

「…………わかつた」

「よしつ、いい子だ

せんせーがぼくの頭をなでてくれた。

「そして、私たちが新しい家族よ」

ゆきねえさんがてをひろげてる。

「よつこや、柊家へ。私たちは、灰斗君、君を歓迎するわ」

そして、ぼくにあたらしいかぞくができた。

## 第一話

「ふつ、ああ～あ」

目覚まし時計を確認。

うむ、いつもと同じ朝の五時だ。

ひやつひやと家を出る準備して学ランに着替える。

間隔に出でると、見慣れた白髪で無表情の女性がお茶を啜っていた。

「お早う御座ります、マスター」

「おはようねえ、インフ」

無表情の女性の名はインフ。

自称最高水準のアンドロイドだ。

感情はあるのだが、あまり見せない。

といふか、あまり感情の起伏がないのだ。

ちなみに服装は、チャイナ服。

よくわからんが彼女の趣味？ らしい。

ちょこちょこ服装が変わるのが、コスプレかと思つような物ばかりを好んで着る変わり者だ。

「よつやく今日から復学ですか？」

「ああ、長かったよ。

つたく、たかが上級生を殴り飛ばしたくらいで一ヶ月も停学なんて思わんかったぞ」

「正確には、嫌がる女生徒を長期に渡つてつけまわし、襲おうとしていたため、その場に居合わせたマスターが上級生の下顎を碎いたから、でしたか？」

「そつ。さりに言つなれば、その場にいた上級生十人の下顎と骨盤を碎いてやつただけだよ。

つたく、下顎ぶつ飛ばしてサイツコーに笑えるツラに整形してやううと思つてたのによ。力足りんかったみたいだわ」

「マスター。あまりその様なことを申されていますと、せつかく皆様が頑張つて停学で止めて下さつた意味が無くなります」

「悪い、悪い」

茶を啜るチャイナ団子へアーロボに言われてもあんまりピンとこんな。

無表情のままだし。

とりあえずオレも茶を飲み、鞄を持つ。

「んじゃ、オレは隣の姉妹の朝飯作りに行くわ」

「ならば私も行きまーす」

オレの言葉を聞き、インフも立ち上がる。

そのまま一人で並んで家を出て、隣に建つ柊家に向かった。

すでに見慣れた柊家。

小六から中二の外まで過りしたんだから当たり前か。

……まあ、みんなに話題なかつたけど。

オレは合て鍵をポケットから取り出し、慣れた手つきでドアを開ける。

「ただいま～？」

「失礼します」

まだ寝ているのか、家の中は静かだ。

まあ、仕方ないことかもしけないな。今この家には大人がないんだから。

姉妹の両親である、柚木姉さんと秋さんは仕事の関係で今この島を出でている。

そのため、今この家には姉妹と、いつもして出入りしているオレといふくらいしかいない。

ちなみに、オレの保護者である志保姉は病院の仕事が忙しくてあんま帰つてこない。

まあ、帰つてたら帰つてきたで大変だけな。

そんな事を思いながら朝飯を作つていると、階段の方から足音が聞こえてきた。

「おはよー、灰ちゃん」

「おはよーさん、楓」

眠たそつに田を擦りながら、全体的に小さな少女がリビングに入ってきた。

彼女の名は楓。柊家の長女で、オレの一つ上の学年で生徒会長をしている、他称才色兼備のスーパー会長殿だ。

ちなみに、セミロングの茶髪は地毛だ。

まあ、全体的に小さいのと胸がアップルパイの厚みといい勝負してるくらいしかないので玉に瑕だな。いや、ほかにも難点はあるんだけど……

「ちよっと、灰ちゃん。私はお姉ちゃんなんだから、りゅんとお姉ちゃんって呼んでくれなきゃダメでしょ？」

頬を膨らませ、腰に手を当てる楓。

いや、そういうわれてもなあ。ずっと姉なんて呼んでないんだから今更変える気はないしなあ。

「ちよんと聞こてるの？」

せつまつて、また頬を膨らませる楓。

いつ見てもこの表情は可愛いなあ。この頬をパンパンに膨らませて顔を真っ赤にするの。

「聞いてるよ、かえりゅん」

「あう」

オレがせつ返すと、たちまち顔を真っ赤にして俯く楓。

なんだから。昔から楓か、かえちゃんって呼ぶと顔を真っ赤にすんだよな。  
かえちゃんって呼ぶと顔を真っ赤にすんだよな。

そんな事を思つてゐる間に、楓はオレがいる部屋から離れ、リビング  
に移動していた。

「よしぃ、出来た」

楓が起きて数分後、朝飯が出来た。

今日は気分的にピザーストとベーコンエッグ（だけ？あの日  
玉焼きとベーコンのやつ……まじつか）とカラダにリンクだ。

「楓、インフ。朝飯出来たから、どうちか葵を起ししてくれ。  
んで、残つた方は朝飯運ぶの手伝ってくれ」

二人がいるリビングに向かつてそつまつと、オレは朝飯を乗せたお  
盆をウェイターのように片手に乗せてリビングに向かう。

リビングに着くと、インフがオレの手からお盆を取り、テーブルの  
上に乗せながら口を開いた。

「マスター。Ms・楓はお手洗いに向かわれました」

「ん、わかった」

「私が朝食を配膳しておきます。ですので、マスターはMs・葵を」

「あこやー」

「Jリマインフに任せ、オレは一階へと上がつてこぐ」

葵の部屋の前に着くと、ドアを一度ノックする。

「葵へ。起きるへ」

「いいへん

変化無しつ。せっかく擬音入れてみたのに。なんかむなしくなっただけか?

オレは気を取り直してもう一度部屋をノックする。

「お~い。愚妹。サッサと起きる~」

う~ん。やっぱ変化無しか。

よしつ、突入準備だな。

カウントダウン開始。

三.....

二.....

一.....

「一、二、三~!」

勢いよくドアを開ける。

「葵つ、起きる~」

「んう、んう～」

ベッドから声が漏れ聞こえるが、布団にぐるまるだけでベッドから出でじみつとはしない。

ほお～、いい度胸だな。お兄様を怒らせたいのかなあ～？

オレは、葵が眠るベッドに接近していく。

「んう、すう、すう、すう」

「つたぐ、寝顔は可愛いのに起きたらオレ限定の暴力女だからなあ。」「マイシナ」

気持ちよさにつける葵の柔らかい頬をつつき、寝顔を見る。

「んう～」

眉根を寄せ、布団の中をモゾモゾ動く葵。

さて、そろそろこの暴力お姫様を起こすかな。

「オラッ、起きる懸妹！」

「あやんつ！」

オレは布団を掴み、勢いよくひっぺがした。

掛け布団の下から腰まである長い茶髪の少女が、冬眠中のヤマネみたいに丸くなつた状態で出てきた。

「テメエ、なにじやがるつー！」

この口の悪い少女の名は葵。

オレの一つ下で、学園の付属に通つ中二だ。

いつもピンクの生地に可愛らしいアニマル柄がプリントされたパジャマを着ていて、日がな一日パジャマで過ごすすぐたうだ。

暴力お姫様のクセにこいつた服装が好きなんだよなあ。部屋にも所狭しとぬいぐるみが並んでるし。

「サッサと起きひ、愚妹。朝飯が冷めるぞ」

「いのせえよ、クソ兄貴」

『氣の強さを表すかのよつな吊り田』が、オレを睨む。

ヤバいな。空気が熱くなつてきてる。

「焼くぞ、テメエ」

「焼かれる氣もなければ、お前にオレを焼けるだけの力もあるとは思えんな」

口ではやつぱりつとも、背中を冷や汗がぬつ。

「そつか、そつか。じゃあ……」

ヤバい。焼かれるつー！

急いで背後にあるドアへと走る。

「くたばれ、クソ兄貴イイイツーー！」

「ぐはあふあつ！！

ベットのスプリングを利用して跳躍し、オレの無防備な背中に炎を纏う、灼熱ライダー・キックをかましてきやがった。

皮膚が焼けるような痛みに廊下を転げ回る。

まあ、ホントは痛くこやーでせつなどない。

あんの発火能力者めえ。  
オレを殺す気か！？

なんとか廊下を這つて階段を下り、風呂場に向かう。

サツサと上着を脱いで冷水で背中を冷やしていく。

火傷はないが、綺麗な青い痣がある。結構痛いんだよなあ、あの愚妹の飛び蹴り。

ていうか、あの愚妹の蹴りはかなり強力だ。  
確かに前に十枚の瓦を軽々と割つてた覚えがあるんだよなあ。炎なんてただのオマケの演出だし。

ていうか、炎いらねえだろ。足の周りに出しどきながらそれは使わずに、わざわざ服の下に炎を顕現させて皮膚だけ焼こうとしやがつて。

そんな事を思つてると、背後に何かの気配を感じた。

「マスター。お二人が食事を終えました」

なんだ、インフか。

オレは水を止め、背中の水氣をタオルで拭い取る。

「そつか。じゃあオレもサッサとメシを……」

「大変おいしう御座いました」

「は？」

無表情で訳の分からないとを言つていひ。

「ああ、そつか。お前も食つ……」

「大変おこしゆう御座いました」

だから、なぜここにタイミングでそのような事を言いやがるのかな  
あ？

服を着直したオレは、改めてインフを見てみる。

わしきと回じ団子チャイナ。特にこれといつて変化は無によつた  
ん？

インフの口元に僅かに何かがついてる。

「インフ。お前、口元になんかついてるぞ」

「それはおそらく……」

口元についたものを指ですくい取る。

「先程、Ms・葵と分けて食したマスターの朝食かと」

「そつか、そつか…………つと待て。お前、今なんか明らかにおかしな事言わなかつたか?」

「いえ、特には……」

機械的に小首を傾げ、指についたものを舐めとる。

「オレのメシは?」

「大変おいしう御座いました」

「全部か?」

「Ms・葵と私の体中に半分ずつ、大切な栄養分として摂取されました」

「低水準口ボ＆愚妹どもめがアアアツー！」

いくら心優しいこのオレでも、さすがにこれは怒髪天に来ちゃいましたよ〜〜。

ブツー！ ロツロスツー！ーーーー！

オレは一人に、オレ的正義の名の下に制裁を加えるべく、洗面所から出る。

まずは愚妹からだ。

アイツが発端にして元凶なのはすでに今までの経験が物語つていやがるんですよー！

ズカズカと乱暴に廊下を歩いていく。

リビングのドアに手をかける。

ふつふつふつ。田に物見せてやるぜい。

テンションを上げ、兄として愚妹に教育してやるうと意気込む。

だが、この時オレは気づいてなかつた。

オレの背後から魔の手ならぬ、魔のチョップが振り下ろされようと  
していることを……

ズドムツ！！

「ガハツ！？」

背後から的确に、我が脳天に鋭く重い手刀が振り下ろされていた。

「マスツ」

ズドムツ！！

「ガハツ！！」

「ターッ」

ズドムツ！！

「ガボツ！！」

的確且つ高い攻撃力を誇る殺人チョップによつて、立つていられなくなつていいく。

「誰ツ」

ズドムツ！！

「ぐぼふつーー！」

だが、このバカロボの殺人チョップは、崩れゆくオレに一切の情け容赦もなく、チョップを決めてきやがる。

「ガツ」

ズドムツ！！

「ゴボツー！」

しかも、高威力が原因で何度も体勢崩れて位置がズレるオレの脳天に、的確に一片の容赦もズレもなく繰り出してくれる。

「低ツ」

「ズドムツー！」

「ズドムツー！」

オレ、コイツのマスターだよな？

「水準ツ」

「ズドムツー！」

「ズドムツー！」

自信なくなりそ

「ですッ」

ズドムツ！！

「ヽヽほほつーー！」

ヤバい、意識が……

「かツ」

ズドムツ！！

「ヽヽほふあつーー！」

テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレ

どつかからそんなゲームオーバーチックなBGMが聞こえてくる。

「殺った？ インフ」

意識が混濁しつつあるオレの耳に、愚妹の声が聞こえる。

「いえ、まだ意識が残っているはずです」

いつもと変わらぬ、無表情に死んだ魚のような目、抑揚のない声で愚妹に答える低水準。

「じゃ、トドメ」

可愛らしく死刑宣告を告げ、愚妹が大きく腕を振り上げる。

震む視界の中で、確かにオレは見た。

愚妹の手から、少し大きなラジカセが高速で放たれ

メギッ！

「ああああああああつ……？？」

世界で最も尊いオレの頭が無事であることを祈る暇さえ<sup>アラカル</sup>なれど、  
オレは意識を失った。

## 第一話

「あんの遺伝幼女めがつ」

こぶができた後頭部をアイス枕っぽいので冷やしながら、教室の机に突っ伏す。

「よお、灰斗。また葵ちゃんにやられたのか?」

笑いを堪えながらバカがやつてきた。

この全身からバカを放ち続けるバカは赤城<sup>アカギ</sup> 渡瀬<sup>ワタセ</sup>。跳ねまくつて  
る赤く染められた髪に、バカが溢れて止まないバカだ。

「黙れバカ。無駄にバカ。変態バカ」

「ちょつ、バカ多くね!?」

「事実だ、人類史上最もバカで見るに耐えない変態バカ」

「……それってなんか凄くね?」

オレの机に乗りかかるんじゃないかと思ひへりい勢によく突っ込んでくる渡瀬。

「貶してんだよ。氣づけ、バカ」

「ひでえよ……」

泣きそうな顔で崩れ落ちるバカ。

正直、見るに耐えないウザさなのでいつものヒルハリ箱に突っ込んで差し上げよう！

ああ、なんて優しいんだオレは。神様顔負けの優しさだ。

一通り血画血贅をしたオレは、いつもまつてのの字を書いているバカに近づいてみる。

あまりのキモさに誰もが避けて通っている。

さて、どうやって捨てようか……

オレがそんな事を考へてると、背後からぬうつと何かが現れた。

「！」の見るに耐えないバカはどうしたのだ？ 霧崎氏

「うをうー？ ビックリした。なんだ、貴樹か」

コイツは桐生<sup>キリュウ</sup>貴樹<sup>タカキ</sup>。常に悪巧みをしていそうな顔をしている男だ。  
事実、コイツは常に悪巧みをしている問題児だ。

ちなみにコイツは、相手の名前の後に必ず氏<sup>ウジ</sup>をつけて呼ぶ変わり者だ。

この二人はオレの悪友で、よく二人で連んでる。

「で？ これは何だ？」

ぐずぐず鼻を啜りながらのの字を書き連ねている渡瀬を指差す。

「いつも病氣だ」

「ならば、ゴミ箱行きだな？」

そうこうして手際よくゴミ箱を持つてくる。

各教室には、分別をするためにいつかのゴミ箱がある。燃えるゴミ。燃えないゴミ。ビン。カン。ペットボトル。この五つだ。

だが、この教室、というより渡瀬が存在する教室には必ず”汚物用”と”カデカ”と書かれたゴミ箱がある。これは渡瀬専用のゴミ箱だ。貴樹は、渡瀬専用であるこのゴミ箱を持ってきたのだ。

「さて、この汚物を詰め込むか」

オレは渡瀬の……いや、もうバカの呼び名はバカでいいや。それで通るし。

オレはバカの空の頭を……いや、違うな。バカと変態とHロとキモれとetc.とetc.で構成された頭を掴み上げる。

「貴樹。セットアップ！」

「オ～～ケ～～イー！」

貴樹は汚物用ゴミ箱を傾け、ダンクがしやすいようにする。

「トライツー！」

バカの体を宙に浮かせ、右の拳をバカのドテツ腹を殴り飛ばして差し上げる。

「ぐふえつー！」

体がくの字に折り曲がり、汚物用ゴミ箱にケツから入つていった。

「出来上がり～」

ゴミ箱から足と上半身のみが出たバカヤドカリ、略してバカガリが出来上がった。

「喜べ赤城氏。貴様のような汚物に似合つた巣を手に入れられたのだ。泣き叫んで喜べつー！」

高笑いをしながら、貴樹がバカの巣をガンガン蹴つてる。

あんま蹴ると倒れ……

ガタンッ！

「イッテエエエエエッ！ー！」

やつぱり倒れたかった。

はあ、バカがぶつけた側頭部をおさえながらなんか喚いて殴りかかるうとしてるけど、ゴミ箱といつ名の巣に詰められてるからカツコ悪いし、あそこからは動けんだろうな。

「ハハハハハハハハッ！！ 赤城氏。貴様如きがこの俺に触れられるとでも思っているのかつー！」

妙に力強い声を上げ、貴樹がバカの顔面にハリセンによる高速往復叩きをキメてる。

「ブツー！ ゲブツー！ グボハツー！」

段々バカのツラが赤くなつていいくが、貴樹は「整形だつー！」と力強く言い放ち、授業が始まるまでバカのツラをさらに叩き続けていった。

……え？ 止めないのかつて？

バカを言つんじゃないよ。これがいつもの朝なんだ。止める気もないし、学園関係者ですら渡瀬<sup>ハ</sup>バカ＆変態で通つてるし、バカが変態でみんなわかるくらいこの学園じやあ常識の存在なんだからいいんだよ。

## 第三話

昼休みを告げるチャイムが学校中に響き渡る。

「よつしゃ終わつたぜえええーーー！」

と同時にバカが雄叫びを上げた。

毎度の事ながらひみせいな、あのバカは。

「メシ食いに行こつぜ、灰斗」

バカが電光石火で接近してきた。

ウチの学園は大学の付属で中学からある。

中高大学は個々に購買があつて、食堂は中高大学共有だ。

「悪いな、バカ。今日は愚妹作の頑張りましたよ弁当だ

「なぬつー？  
アイマイ  
愛妹弁当だとー？」

「つと待て。なんだその愛妹つて」

「愛妻と同じ様な意味だ！」

やつぱこのバカの思考回路は常人でなくともわからん。  
一回カツ捌いてみるか？

「まあ、訳分からんバカなことをほざくのはほじつものことだからよ  
しとしてやろう。  
んじゃあオレは行くるからな」

そういうて席を立ち上がろうとしたとき、教室のドアが開いて我が  
狂暴なる愚妹が侵攻してきた。

猫かぶり全開の優等生スマイル（しかも他者には決してバレないと  
いう特殊スキル付き）で近付いてくる。

「どうして毎休みになつたのにいつもの所に来ないんですか？ 兄  
さん」

「つうじと優等生スマイルで問いかけてくる。

「ん？ ああ。それはな、このバカに捕まつてたからだ」

中指を立て、バカを指差す。

「なぜに中指！？」

とりあえずバカは永久無視の方向で。

「そりだつたんですか。

すいません、赤城さん。いつも兄さんが迷惑かけて」

「いや、迷惑かけてきたんのはコレの方だぞ」

「そりだぞ。オレにあんまり迷惑かけるな」

「黙れ愚民」

「しどこーーー！」

よよよ、と泣きマネをしながら女座りをするバカ。

正直、キモいのレベルを軽々と跳躍して次元すら超えてるからなんて言えばいいのかわからなくなってきたよコンチキショウツ。

「相も変わらず大変だな、霧崎氏」

ぬうつと、我が死角たる右斜め後ろから幽霊のように出現する貴樹。毎度の事ながらいつからいてどこから現れるか分からんヤツだ。もう慣れたつもりでいても、やっぱりビックリする事はある。まあ、今回のはなんとなくいそくな気がしてたからなんともないけどな。

「なあ、貴樹。このバカ、いつものとこに捨てに行くか？」

「いーいですなあつ。  
いいですなあつ！  
いいですなあツ！！  
いいイイイですなアアアツ！…！」

無駄に、且つ意味不明にテンションが上がっていく貴樹。  
さすがは変人。といったところだろうか……

「というわけで、だ。このバカを処理してくるから葵は楓んとこ先に行つといてくれ」

「え？　え？」

一人事態についていけない愚妹が、オレたちを交互に、特に縄ではなく、なぜか有刺鉄線をぐるぐる巻きにされているバカを気にしていたが、教室からサッサ追い出して差し上げた。

「捕縛完了！」

「どこからともなく取り出した有刺鉄線でバカを生け捕つた貴樹が、声高々に宣言する。

「よしぃ。んじゃあ、この恍惚ド変態クソバカ力カスを処理しに行くか！」

汚く、且つ重度の吐き気と眩などがいとも簡単に引き起こせるほどキモチワルイおぶ……汚物に付けられた首輪に紐をつけ、ずるずると引きずつて校舎を出る。

校舎裏には、今も現役で動く古びた一昔前の焼却炉がある。オレたちの目的地は、もちろんそこだ。

わざわざと校舎裏に回つたオレと貴樹と変態B A K Aは、ちゅうとめんじくわことになつていた。

「 」の間はよくもやつてくれたな？ ん？ オイッ」

二十人の不良が現れた！

なんてドリ ハ風に言つてみたが、要するに一十四五のやんちゃ坊主共に囲まれているのだ。

しかも、全く見覚えもなければ身に覚えもない。

「 なあ、オレ等なんかしたつけ？」

「 さあな。悪いが俺には身に覚えがない」

「 そりやそりだら。貴樹はオレ等と違つて頭脳労働担当なんだから」

お互ひ、こんな奴ら知らないよなー、と言つてると、バカがいきなり口を開いた。

「すまん。アイツ等ヤッたのオレだわ」

申し訳なあひんな事をせんでも、

「じつも、皆ねえ。煮るなり焼くなり弓をあめなり、裂くなり鉗す  
なつ六だらけにななつ、そつやあもつ好きにしてやつりやつて下  
れこな」

「へやこなッ……」

やさかやーズに獻上して差し上げるはりとおもてた、マル

「つひ、おーこつ……見捨てるなよつ……友達だう……」

「…………トモダーチ？ アー、ソーニー。ワタシ一ホンガワカコマヤ  
ハハハーン……」

「ワカラコマセハハハーン……」

「うふひ、向こうになつてんだよー。しかも貴樹までひ

「ヤツパリイ、ニホンゴムツカシイデエエス！」

「ムツカシイデエエス！！」

「いい案配決まつたらやる」とほーつ。

オレと貴樹はバカを踏みつけ、ハイタッチを交わす。

「踏むなッ！！ そして復唱すんなああああッ！！」

足元でバカが騒ぎだしたんで、とりあえずMENOOOTIを踏みつけて黙らせて差し上げた。

嗚呼、なんて優しいんだオレ。後光が、今オレの後ろから後光が射してゐるゼイ！

「さて、神が如く慈悲深いオレはこの場を去らせてもらひう

「ふむ。確かに、バカに用があるのならば俺達には関係無いな

(バカを献上して、サツサと立ち去るが吉だな)

( やつだな。我が相棒よッ ーー )

オレ等はアイコンタクトを交わし、バカを蹴り飛ばす。

「げふんっ」

変な音を発して無様に転がるバカ。

そして、オレ等はサッサと退散しますかね。

オレと貴樹は踵を返し、帰るゝとするとい、やんけーーズが無礼にもこのオレ様に声をかけてきやがった。

……が、聴覚をシャットウダウンして無視する。

「貴樹へ、ヤ二ないか？」

「悪いが俺は煙草は吸わんのでな。持ち合せさせまいと

あー、そういうえばそーだつたなー。

「煙草ならオレ持つてゐるわ」

「なぬつーー？」

聞き捨てならぬ言葉が、背後からバカの発せられる。

オレは速やかにバカの下へと駆け寄り、煙草を奪取して元の位置へと戻る。

「なつーー？ テメツ、煙草盗るだけかよーー！ 助けねえのかよーー！」

オレはゆっくりと振り返り、全宇宙の常識をこのバカへ教えてやることにした。

「何言つてんんだ？ オレが他者を、特にバカと男を助けないのは知つてるだろ？ つか、それ以前にオレが他者と行動を共にするのは奇跡に等しいことなんだ。それだけでも喜べ。そして敬つて奉つて、媚び詔え。このクソ虫がツ」

「そ、そこまで言つたか？ フツー」

「言ひツ！－ 何故なら、オレは普通じやないからだツ！－！」

何故か辺りに沈黙の帳？ が落ちる。

「……力説するといつか？ そい」

「当たり前だ。オレがお前等と連む理由は……わかつてんだろ？」

意図せずして、声が低くなる。

ちつ、やつぱまだダメか。

「そうだつたな。すまん、オレ忘れてたわ」

オレの隣で、バカが空の頭を下げる。

「まあ、オレは神が如く慈悲深いから

たつぶり溜め、会心の笑みで下知を下した。

「学校の床といつ床を全部舐めたら話してもいい」

「鬼ッ、悪魔ッ！？」

「せりはりせり。何を今更な」とを言つて居るのだ、赤城氏」

「全くだ」

感極まつて震えるバカを見下しながら、オレと貴樹の笑いはしばらく続いた。

一通り笑い終えたオレ達は、とりあえずやんちゃーズにバカを再献上して差し上げようかな~、とかなんとか思つてみたりみなかつたりしてると、やんちゃーズの方からなんか今更なことが聞こえてきた。

「なつ、アイツ<sup>瞬間移動能力者</sup>だつたのか!?」

「フツ、何を今更に……」

「バカは黙つていろ」

「そうだ、バカ汚物は黙つてろ」

「ひでえつ」

なんか醜いのが打ちひしがれてるけど、とりあえずその存在そのものを無視する方向で。

……もつかい、有刺鉄線でボンレスハムにしたるかや? ま、いー  
や。キメエし。

「それにコイツの能力は瞬間移動じゃないぞ」

「なに?」

「カラッと無視ですかつーー。」

『バカは黙つてろッーー。』

「うあい」

オレ達だけじゃなく、やんけやーズにまで口を揃えて言われりゃあ、さすがのバカも傷ついたらしい。

……珍しいこともあるもんだ。臓物シャワーでも降るか? 「ー、なんていうか、ベシャッ、って。

……降るわけないか。

「じゃあコイツの能力はなんだよ?」

「貴様等如きやんちやーズに教えてやる義理など無いわッ」

「無いわッ。ちなみに奴は超能力者だ。と、だけは言つておひり」

『なにひー?』

やんちやーズが口を揃えて驚いてるよ。

あつはつはつはつはつ…………。キメハ。

でもまあ、驚くのも無理はないか。だつて、超能力者指定されるほどの能力者は二十人しかいないからな。

ホントは番ツガイの能力があるから「十人じゃないんだけど、あれはもう片割れがないから能力者でもなんでもないだ。

そづ、なんでもないだ。

「おーい、どうしたかいドブフオツー!ー!ー」

声が聞こえてきた方向に向けて鉄拳制裁を加えて差し上げる。

嗚呼。まつたく持つてなんて優しいんだこのオレ様はツ。

「まつたく、声をかける時は半径百メートル四方は離れないと書って  
いるだろ？」

「そんなの今聞いたわ！」

「今新たに加えたんだから当たり前だつ！」

「なんて理不~~タ~~つ！」

よよひ、と崩れ落ちるバカ。正直もクソもへつたくれも無くへり  
いキメハ。

と、そんな事をしていると、少し間の抜けた定番の音が聞こえてき  
た。

『ぴん、ぴんぽんぽんぽお～ん』

訂正。声でした。しかもこの声って

『灰ちゃん、灰ちゃん。お姉ちゃんおなかすいひやつたよ～。早く  
『飯食べよーよ～』』

やつぱり、楓か。相変わらず公共物を私物のように扱ってるなあ。  
オレが関係するときだけだけど。

『じゃあ、いつもの所で葵けやんと待ってるからねえ～。ぱんぽん  
『ぱんぽん』』

あー、なんか畠さんアホヅラ晒してますねえ。

まあ、無理もないか。ファンクラブなるものまである我らが会長殿  
からの指摘しのハリワールドだ。羨ましくてたまらないんだろ。

『ちょっと、お姉ちゃん！ また兄さん呼ぶのに放送使ったの！？』

お？ 今度は我が凶暴なる愚妹の声だな。

つか、楓。放送のスイッチ切り忘れてるよ。

『あつ、葵ちゃん！ 今、灰ちゃん呼んだといひだからひより少しこ  
たら来るよ』

『やうひに事じやなくて 』

『今日のお弁当。灰ちゃんに食べてもういたくて頑張つて作つたん  
でしょ？』

『なつ！？ 何言つてるの！？ ベつ、別に兄さんなんかのために  
なんてつ』

『え？ 違つ？ 灰ちゃんの好きなものばっかり入つてたから、  
てつきり灰ちゃんのために作つてきたと思つたんだけど……』

『ほほう、今日はオレ好みのお弁当か。

つか、このままだと姉妹の会話がだだ漏れなだけでなく、オレの命  
が危なくなる。

二人のファンクラブとか言つ得体の知れない狂氣の集団に殺される  
つ。

オレの…… オレの命がッ。

世界で最も尊いオレの命がッ。

そうと分かっていればやる」とは一つ。

今から放送室に乗り込んで一人を止めて、メシ食つて、更にファンクラブなるものから逃げる。

これでOKだ。

そつと決まればバカとやんすかーズは放つておいて、わざと

『なにやつてるの? 楓、葵さん?』

「ん? ジの声って」

「まさか…… アイツかっ

ジの声はまさか……。

生徒会副会長にして風紀委員長の、

『くくりちゃん!』

『薙原先輩!』

オレのナギハラ 薙原くくりかつ!?

くせつ、まわか副会長が出てくるとせ。

『またたく。また公共物を勝手に使っちゃダメでしょ!』

『うう』

『葵さんむ。ちやんと楓を止めてくれなへりや困るわ』

『はい……』

副会長が一人に説教してる間にオレは速攻で放送室に向かわねばっ。

副会長のファンクラブ、えつとなんつったっけ？ とりあえず、なんとかって言うファンクラブも出てきたら限りなくやっかいだ。

それに副会長には人質取られてるし。

早くいかんと何を言われることか。

『それと、そこに木琴あるわよ』

『ふえつー?』

『……ホントだ』

……………二人揃つて木琴の存在に気付いていなかつた  
とは……。哀れなり、木琴。

つと、こんなことをしている暇はねえつ。

「貴樹、バカ。オレは放送室に行くからあと頼んだッ」

「うむ。この場はバカに任せとけ！！」

「オレ任せーー？」

無駄に『デカいリアクション』でバカが反応してるけど、いつも通り完全無視の方向で。

「自覚はあつたのだな、バカ氏」

「自覚はあるつ。そしてオレの名前はバカじやねえッー！」

はあ。コイツ救いよう無いな。バカだし。

つと、いかんいかん。こんなことしてる場合じやない。

オレはこの場をバカに押し付け、走り出す。が、

「待てや霧崎ーー！」

やんひやーズの内の一枚がオレの前に立ちふさがってきた。

とりあえず、殴る。。

「ぶツー！？」

右ストレートが綺麗に顔面に決まつた！ 効果はバツグンだ！

「チツ、手が汚れた」

無様に鼻血を垂れ流して寝てるやんちゃーズその1から離れ、バカのカッターで血を拭う。

「ちよつ、おまつー？」

「……かえつて汚れたか？」

「む」

うんうんと頷く貴樹。

やつぱ、汚れるか……

「うむ。じゃねええええッ！！」

と、いきなりバカが吠えた。……キチガイにでもなったか？

「うるせーべ、バカ」

「舌を噛んで喉を裂いて声帯にじって黙れ」

「それは死ねつて事か！？」

……は？ 何をそんなオーバーな反応してんだ？ オレはただ一番手つとり早い解決方法を述べただけなんだか……

「まあ、そんな事はどうでもいいか」

「オレの命つてどうでもいいレベル！？」

『黙つてろつ』

「うあい」

再び全員から集中攻撃を受けるバカ。

若干哀れだな。若干。

つて、マジで「こんな」としてる場合じやねえっ！！

急いで体を反転させ、走り出す。

「待てや霧崎イツ」

やんぢやーズのリーダーらしき傷物スキンヘッドが、オレに向かって腕を振ってきた。

それと同時に、拳大の火球が飛んでくる。

「効くかボケエツ！！」

即座に左右のヒップホルスターから銃を抜き、対能力用強化ゴム弾

を火球に叩き込む。

「ゴム弾にぶつかった火球はゴム弾を焼くだけに留まり、オレに触れることはなかつた。

「なつー!?」

傷物スキンヘッドが醜いツラを更に醜く歪め、驚いている。

「対能力科舐めんなッ！」

再び引き金を引き、連続でゴム弾を額に叩き込む。

「ガツー！」

叩き込む。

「ガガガツー！」

傷物スキンヘッドは大きく仰け反る。

そのまま体の中心線に沿つて上から順にゴム弾を叩き込んで、更に上体を反らせる。

「ガアツ！！」

「 ッーー？」

バカみたいに大口開けたのを見て、前歯に一発のゴム弾を撃ち込む。

跳弾したゴム弾が口腔中に入つたらしい。傷物スキンヘッドは、無様に地面に叩きつけられ口を押さえて転げ回つてゐる。

「 ぱつ、ボスツー！ 大丈夫ですか！？」

その他のやんちゃーズが傷物スキンヘッドに駆け寄つていぐ。

つか、ボスつて……弱つ！

「あと頼むわ！」

「おー」

「つむ

一人の……『めん、間違えた。一人と汚物の怪音を聞いたオレは、銃をホルスターに突っ込んで上着で隠して走り出す。

一応銃は校則違反だしな。バレるといろいろ面倒だからな。

それに、この銃も対能力用ゴム弾も自前だからな。取られると困るよ。

と、そんなことを考えている間に、校舎に突入した。

さつきの放送のせいか、周りの生徒共の視線がメッチャ痛い。

絹糸で編まれたオレのハートは、ガラスのハートより脆いんだよ。

繊細なんだよ。

だからそんな目で見ないでくれ。

ちょい優越感が生まれてきたりやこますでしょ！

生徒といつ名の愚民共から、いろんな意味でアツイ視線を送られる  
オレ。

フツ、モテる男は辛いぜイ！

……男共はオレを見るなっ！！ 清らかなオレの存在が汚れるつ。

オレを見やがる男共を一人一人丁寧に殴つて差し上げたいといひで  
すが、放送室も間近なんで我慢します。

オレ優しい！ オレの優しさを、敬つて媚び詫つえ、愚民つ共

『それにしても遅いわね、霧崎君』

『今急いで来てるんじゃないですか？』

『早くー。お姉ちゃん、お腹と背中がくつこすりつけ！』

ふふふつ。待つてなさい楓。今みんなの神様、霧崎灰斗様が突入するぜイ！

オレは勢いをつけ、放送室のドアに蹴りを入れた。

「みんなの神様、霧崎灰斗様参上！ サあ、放送のスイッチを切りなさい！」

つて、あれ？ いない？

「……」見回してもちびっ子姉妹も副会長もいない。

……なぜに？

『もしかして、灰ちゃん放送室に行つたのかなあ？』

『兄さんバカだからありそ』

しまつたアアアアアツ！！

そういえば、放送室以外にも放送流せるところあつたんだったアッ！

『早く来ないかしらねえ？ 私もお腹が空いてきたわ』

『薙原先輩は先に食べてて下さー。どうせ兄さんはケンカでもして  
るんでしょうから』

『ええっ！？ 灰ちゃんイジメられてないかなっ！？』

『大丈夫でしょう。霧崎君はよくケンカしているみたいだし』

『そりそり。兄さんはケンカくらいしか取り柄無いんですから』

『おぬあるえー。好き勝手言いやがつてえー。

オレは即座に方向転換し、生徒会室に向かう。

放送室以外で放送を流せるといつて言つたらあそこしかナッシング！

『本当、早く来ないかしら。私、彼に言わなくちゃいけないことが  
あるのに』

『何々?』

なに好奇心いっぱいに訊いてんだよ楓つ。

『歩く校則違反こと霧崎灰斗君。聞こえてるかしら?』

「誰が校則違反だッ」

オレがつ、いつつ、ビニヤつ、校則違反したッ!!

……いや、してるか、校則違反。銃とか、ゴム弾とか。

でもバレてないはずだし……なんだ?

『ケンカや迷惑行為に飽きたらず、髪を染め、更にはカラーボンタクトまでつけるなんて……』

いや、いやいやいやいやいや。これ地毛ですよ? 地田ですよ?

ハーフですよ、ぽかあ！

……いや、見方によつてはクオーター？

つてか、自前だつて知つてるだろ！？

「コンチクチクショウツ。副会長のくせに、副会長のくせに。」

放送室に来たときの倍くらいのスピードで階段を駆け上がる。

つとも、運動神経いいわけじやないから大して変わらんけど。

『染めるなら金髪とかにすればいいのに、なんで灰色なのかしら』

だから地毛だとゆうとつままずじょうが！――

ダークグレーの何が悪いつ。

『灰ちゃんはハーフさんだよ？　だから髪の色が灰色なんだよ？』

『でも、兄さんハーフなのにあんまりハーフっぽくないんですよ』

『確かにそうね。髪と目以外は日本人と大して変わらないし』

それのどこがいかんのじゃイ！！

全く。オレは親父似なんだよ。麻衣はお袋似でお前らの言つハーフっぽさがあるけどねつ。

……麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。麻衣。……ごめん。ごめんな。お前を守つてやれなくて……

ハツ！！ いかん、いかん。危うくスーパーネガティブモードに突入するところだつた。

オレは気持ちを切り替え、ラスト一直線の廊下を駆け抜ける。

ドドドドドッ

ん？ なんか大人数の足音が、聞こえるような、聞こえるような？

『霧崎イイイイイー！』

「うわー！？ なんかキモい集団来たー！」

男ばっかのムサキモ集団がものっそースピードで走ってくる。

なんで男ばっかなんだよッ！！

つて、そりゃそつか。ウチの学園特殊だもんな。

普通科は男女共学だけど、うちの校舎からは離れてるし。  
能力科と対能力科は男女でのデータの違いを見るために男子校舎と  
女子校舎に別れてるし、委員会とかでもない限り能力科と対能力科  
の男女が一緒にいることなんて

つて、待て。ちょい待て。

じじって、生徒会とか風紀委員会とかの専用のとこだよな。

どっちかに所属してるか、どっちから許可をもらえないと入れないはず。

「トイシ」ことたいぞーから

۷۶

つて、ちょい待て。またちょい待て。

なんか向かい側から女子の軍団が走ってくるぞ！？

なんかメツチャ怖いんですけど……

「不良如きが私達のくくり様につ

「葵ちゃん」

『近付くなああああああああ！』

いやあああああ！

男子ファンクラブ、女子ファンクラブ両方来ちゃいましたよ！？

くせう。あとちょいで生徒会室なの。

すでに生徒会室のドアは女子ファンクラブの波に飲まれてゐるし、後ろは男子ファンクラブに固められてゐる。

いつもは仲が悪いこの集団は、しつこい時に限つて無駄に息ピッタリなんだよなあ。

「ヤバの不良！ 今すぐこの場を離れなさい！」

女子ファンクラブのリーダーらしきかわい子ちゃんが、このオレを指差してきやがった。

「オレを指差すなあ！」

全く。オレを指差すなどとは……。どういつ教育を受けってきたんだよ。

「いいか？ よく聞け！ 人を指差すのは構わない。しかし。しか

よ。

し、だ。」のオレを、」の後光輝「」のオレを指差すのだけは許さんつ」

かわい子ちゃんを指差す。

「何を訳の分からないことを言つてこらのかしい？」頭沸いてんじやない？ て言つか、中指で人を指差さないつ」

「黙れナイチチ！」

「なつ！？ 誰がナイチチよーーー！」

ナイチチのかわい子ちゃんが茹で蛸になつてサル化してゐる。

いや、サルつてほどでもないか。むきーむきー言つてゐるだけだし。

「無いだろ実際。全体的にカワイイし、キレイな顔立ちしてゐし、肌も髪もちゃんと手入れしてゐみたいだけど

」

」で大きな大きながぶりを振る。

「チチ無いだろガツ……」

お？ なんか雷に打たれたみたいになつてゐる。

「ハリマ一トあれやりますか。

はい、セーの。

ピシヤアアアアアン！！

はい、ありがとうございました。

ふう。にしても面白い奴だな。さつきまで顔真っ赤にしてくつつけた指を忙しなく動かしてたのに、急に雷打たれたみたいになつたりして。

……疲れんのかな？

オレは神が如き慈悲深さを持つてゐるから心配で心配で

「ふええええん！！ 不良に汚されたあああ！！！」

なんで?  
どうして?  
なんのさ!?

オレはただバカ直伝の「女は誉めればいいのだよ」と、貴樹直伝の「誉めの中に若干の毒を織り交ぜるのだつ」を実践しただけなのに

しかも全く馴れてない「讃め」を使ったのにあればないでしょうが！

くそう。やっぱバ力直伝は使えなかつたか。

「こんのつ、不良！！ 矢枝ちやんいじめるな！！」

なんかナイチチが泣きついてる女子がこのオレを指差してきやがった。

つか、ナイチチは矢枝つて言うのか

まあ、別にどうでもよかことなのよね。

……ん？ あの女子は確か

「聞いてんの？ 不良、霧崎灰斗つー」

あー、やつぱぱ副いんちよだ。

「副いんちよ。オレを指差すとほい一度胸だな。中二の最後にせりあが恥ずかすうい画像をネットにバラしちゃうか？」

ケータイをちらつかせ、副いんちよに迫る。

「うふーーー アンタまさか

副いんちよの顔が凍り付いてるぜイー！

「いはまかつー 撃入れて差し上げねばー

「いはまかんこんーーー」

手を猫手にして、元やん元やんをやる。

もひりん、首を傾げるのを忘れないぞ。せつ。

「…………？」

ふふふ。あのお堅いこと有名な副いんちよがにゃんにゃんやったんだ。誰もが見たいだろな。

その証拠に、さっきから後ろで意味不明に喚いてたオス共が更に理解不能な雄叫びを上げてるしな。

正直、ウルサくウザることの上ないのよねー。

しかも、副いんちよも思に出したみたいで茹で蛹化してた。

腐つ腐つ腐つ。あ、やべつ。間違えた。

ふつふつふつ、あれは實にオモロい想い出だよ。

ウチのインフが部屋に引き伸ばして貼つてあるくらいだしな。

いやあ、もつかい見たいなあ。副いんちよのこやんこやん。

あれはかわい子ちゃんがやるより、美人タイプの強気つ子ちゃんがやるのが一番だぜイ！

つて、副いんちよにベタ惚れなバカとコズブレロボインフが絶賛してたな。

オレも貴樹もあれには大爆笑したし、満場一致でもつかい見たいんですよ。

「つと、じことしてる場合じゃナッシング！ 早くせんとオレの大事な昼食ターアイムが無くなるつ」

ケータイをポケットに突っ込んで、もつ一つの方のポケットに手を突っ込む。

「まつ、待ちなさい不良！」

「フツ。待てと言わされて待つ奴がどっこいるー。」

ポーズもバツチリ決まつたぜイ！

「黙れ霧崎ッ！」

「寄るなゲス共ッ」

人が折角決めポーズを決めてるってのに、汚いオス共が寄つて来やがつた。

「それ以上近付くなよ。近付いたら撃つぞ」

オレは片手を銃の上に置く。

でも、このカス共はオレが銃を携帯することも知らなければ、対能力科の中でも下位に入るオレが特別クラスにいる理由も知らないんだ。

いや、違う。ちゃんと知らせてあるけど、それを理解しようともせず勝手な噂を流しまくってるバカ共だ。

だから、オレがどんな状態か知らないんだ。

全く。これ以上近付かれると、本当に撃つまつなん……

遠慮もなんもなく一つの集団はオレに近付いてくる。

チツ。しゃあないな。

ポケットから、ボール状のアイテムを取り出す。

手の中にいるのを確認し、その手を振り上げる。

聴覚遮断。視覚遮断。

「ぐうえい！ 必殺、閃光滅閃弾！…！」

ネーミングはインフセントスつ。

オレは一気に手の中にある閃光滅閃弾を床に叩き付けた。

瞬間、強い光と轟音が辺りを支配する……はず。うん。してはまず

ダヨ？ 今はまだ視覚と聴覚を遮断してゐるからわからんないけどねー！

あつ！ ちなみにこれはただの閃光弾テスヨ？

そこんとこ間違いないよーに。

聴覚再起動。 視覚再起動。

ゆつくり田を開く。

ホホホホホッ。男子ファンクラブ及び女子ファンクラブほぼ壊滅状態のようですね。

運良く人垣で目を潰されなかつた奴もいるみたいだけど、このオレのように視覚＆聴覚を守るスーパーアイテム（不可視）を付けてる奴はいないみたいだ。

ウム。これが死屍累々というやつかね？

……字も意味もあつてつたけ、これ。

オレは上機嫌で女子ファンクラブの屍を越えていこうかなく、とか  
なんとか思いながら超強力電磁石入りの靴で壁を歩いてると、後ろ  
から声が聞こえてきた。

「まつ、待て！ 不良霧崎！」

「副いんちょが現れた！」

「ドラ ハのあの曲流れないかな？ あの、なんだっけ？ モンスター  
ーが出てきたときに流れるやつ。」

「変な言い方するなつ」

なんか副いんちょがキレた。

「……キレる十代？」

「違うー。」

「なんか副いんちょ…………怒つてる？」

「そりゃやつでしょー。『んな所でせん』」

「でも、まいつか。そんな事は」

「は？」

なんか副いんちょがマヌケ面を曝してる。

「フツ。オレがお前を許したのが意外だつたか？ まあ、いつもならオシリベンベンの刑だが、オレはお前を許してやる。オレは寛容だからな。オレは。神が如き優しさを持つオレはなッ！」

フツ。決めポーズも再び決まつたぜイ！

さて、なんかふるふる震えてるな、副いんちょ。もしかして、漏るかGOー

……にしてもえらい震えてるな、副いんちょ。もしかして、漏るか？ 「この年で漏つちまうのか！？」

……それはそれで……ねえ？ ほら、強気つ子が漏れそうなの我慢しながらもじもじてる姿は、ねえ？ なんか、上気した頬とか、

ねえ？ 時折ブルツと震える姿とか、ねえ？ なんか、ねえ？ オレが言いたい」と、わかるよな？

なんか、そそらね？

いや、いやいやいやいやいや。別にオレは変態じやねーですよ？

ただ、その姿が可憐くないからって思つてんの。

そりゃとにかく間違えなによー！。

ああ、あの姿を見ると思い出すなあ。

麻衣もトイレ我慢してふるふる震えてたの。

しかも理由が可愛かつた。

「暗いの怖いよお」って涙田で言つんだぜ?

あの姿を見てそつ思わない奴がいたら即刻挽き肉ミンチの胡麻味噌  
和えにしてやるつ。

……なんか自分で言つといて意味不明だな。

ああ、にしても可愛かつたなあ、 麻衣は。

ちょっと薄暗くなつただけで一人でいるのが怖いつて、よく服の裾  
を掴んでオレが離れていかないようにしてたなあ。

トイレに行くのもそうだし、風呂入るのもそうだし、一人じゃ怖く  
て寝れないからって毎日同じ布団で一緒に寝たなあ。

ああ、可愛い可愛いオレの麻衣。

はあ。あまりに可愛い誘拐とかされないかお兄ちゃん心配で心配で片時も田が離せなかつたよ。

手も離せなかつたよ。

いや、手は麻衣が離せとしなかつたんだよな。

ちつちやい手でギュッと握つてくる麻衣は、もうめっちゃ可愛かつた。もう可愛いすぎてパクッとしちゃいたいくらいだたよ。

はああ。可愛いつたなあ。

あ、でも。楓も葵も可愛いつたよなあ。

あの、つていうか柚木姉さんの方の血筋には遺伝幼女と遺伝シンジケがあるからね、一人にもしっかり引き継がれてる。

今でこそ楓はあんな感じたけど昔はシンシンしてたし、テレもあつ

た。

まあ、今では元二一、三度シン出ぬへりこで後はトレオソリーかな。

葵は見ての通りシンを飛び越えて暴力幼女に進化？ したからね。  
昔は可愛かったのに。

楓はシンを出して無理して我慢するから一度オレの前で漏つてたな  
あ。

泣きながらオレの胸を叩く中の少女（見た目幼女）ってのはなか  
なか見れないもんだったなあ。

葵はただ単に漏つてたときもあつたし、蛇見て漏つてたときもあつ  
たなあ。

今では監禁かすうい。

とかなんとか数十秒ばかり思い出して漫つてると、副いんちょが  
なんか怒鳴ってきた。

「ちよっとー そんなバカ面でどに行へつもつよーー 下心丸だ出

し変態猿！！」

「バカでもなければ下心もないつ。そして変態猿では断じてないッ。  
あんまりつせいでバカを呼ぶぞ！」

と言いつつケータイのアドレス帳からバカを呼び出す。

メールではない。電話だ。

理由はものっそい簡単。

『おー。どうした灰斗？』

ケータイからバカの3D映像（ホログラムつやつかな？）が出てくる。

「お前の愛しのハニーが閃光弾でズタボロ制服姿だぞ」

『なにッ！？』

3Dバカが勢い良く振り向く。

そんなことしても見えないけどね。

オレがケータイを動かすか、ケータイの視野拡張機能をオンにせんと見えんのだよ。

まあ、ズタボロなのは半分当たりで半分外れだけどね。それに見せる気もないし。

「見たければここに来ればいいだる。まあ、ここは対能力用特殊加工がされてるから直接は来れんけどね」

『ちくしょう。今すぐ行くぜ、真希さん!』

ふはははははは。バカが真面目な顔してると。

しかもケータイ切つてないし。まあ、オレが切るからいいんだけどね。

「副いんちょ。あと三分もせんづらにバカが来るぞ」

「なつ！？ なに赤城を呼んでんのよ！」

副いんちょはバカがあんま好きじゃないらしい。

一応、容姿はいいぞ、アイツ。面倒見も結構いいし、後輩からの人気もあるし、モテるんだぞ。バカだけど。

まあ、アイツは副いんちょ一筋だから全部断つてるし、何度も副いんちょにコクつてるんだよね。その度フラれてるけど。

む？ バカの気配が

「真希さああああん！！」

「げつ！ 赤城！」

バカが高速で走つてくる。しかもめっちゃ嬉しそうな顔で。

「副いんちょ。バカから逃げたければ逃げてもいいんだぞ？」

「なに言つてんのよ！ そなことしたら三人が不良の毒牙にさ

「いや、かかんないからね。三人ともオレの好みのタイプじゃないし」

「なつ！？ アンタ雑原先輩とも知り合いなの！？」

「……どこのをどう聞いたらふーきーんちよと関わりあるって思つんだよ」

「……女の感よー」

「コイツ誤魔化しやがった」

まあ、よ…………補導されたり補導されたり補導されたりして関わ  
りあるけどさ。ほかにも色々あるけどさ。本人の名誉とかのために  
黙つておいてあげましょう！ オレ優しい！ オレめっちゃ優しい  
！ もうイエス顔負けだよ！

あ、ちなみに補導つてのは警察ではなく、ふーきーんこですよ？  
そここんどこ間違えないよー！」

「真希さん！ 大丈夫ですか！？」

あ、バカが来た。

副いんちょの格好を見て、めっちゃ心配そいつにしてる。

その表情は、好きな女性だからではなく、純粹にケガ人を心配する人のものだつた。

オレにはもう一度と出来ないであろう表情が出来る渡瀬が、少し羨ましいわけねえだろこのすつといじりつこいつ。

あんな顔出来たらバカが移る。バカが。

べつ、別に羨ましくなんかないもん！ そうー 羨ましくなんか……ない……もん……

と、ツンデレ風に言つてみたり～。うまくできたかな？

でもまあ事実だし。あんなツラ、オレがしていい権利は無いからな。それに興味もないし。

「うわっ！？ 寄るな赤城！」

「うわー。副いんちょヒドーな。心配してる人間（と書いてバカと  
読む）に対して寄るなはないだろー。

バカはバカで、気にせずケガしていないか確認してるし。

よじっ。この間に壁から天井に移動してつと。

「ではでは～」

そのままダッシュユー

「あつーー、まつ、待て！」

「ケガしてるかもしねないんだから動かないで下さい、真希さんー！」

「だから寄るなー！」

ははははは。副いんちょ顔真っ赤だよ。茹で蛸顔負けだよ。スイ  
カより赤いよ。

なんて無意味なことを考えながら、みんなの神様霧崎灰斗君は今日もお重を貪り食らうために生徒会室に突入するのであつた、まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1063z/>

---

機械仕掛けの左腕

2011年12月16日19時45分発行